

# 「総合施設」について、そのあり方と効果の検討 —保護者の思いから見えてくるもの—

後藤 晶子、上月 素子

## 1. はじめに

総合施設の導入に際しては、そこで育つ子どもや保護者のさまざまな思いに応えることや、子どもたちに望ましい効果があることを検証していくことが求められる。同時に、求められる保育者養成のありかたも把握しておかねばならない。そこで総合施設の取り組みをしている施設とそうでない保育所の保護者に、子どもの育ちや子どもの思い、保護者の思いについてお尋ねし、あわせて求められる保育者像を探ることとした。

## 2. 方法

- 1) 対象 総合施設として北須磨保育センターの保護者に、対照群として加古川市の神吉西保育所の保護者にアンケート調査をお願いした。期日は2005年12月～2月。
- 2) アンケート項目の策定 総合施設である交野市くらやま園の資料の分析から得られた次の4点を基本にし項目を検討した。①異質性の受け入れ、視野の広がり ②地域社会に対する意識・態度の変化 ③子どもに対する意識の変化 ④行事等における保護者の負担をめぐる葛藤  
以上の他に養成校に求められること等を加えている。

## 3. まとめ

北須磨保育センターの長時間児、短時間児が「早く降園する」「遅くまで園にいる」ことについて、どちらか一方の子どもたちだけが不満を感じている様子はなく、その時々で「もう少し残りたい」とか「早く帰りたい」等の思いがみられるようである。しかし保護者の側には、役割分担をめくり立場の違いによって多少くすぶった思いがみられる。ただ今回の北須磨保育センターでは、数量的にはいずれの立場の保護者からも「仕方ない」「まあよい」が最も多い回答数を得ており、北須磨保育センターの尽力の程がうかがえる。

通園を始めてから子どもが成長したと保護者が感じることについては、地域差や年齢差、あるいは園の違い等の反映が考えられる。その中でも、保育所児の方が集団で生活する時間の長いことから、態度や習慣の中で育ちやすいものが推測された。

保育者養成に関する今後のあり方について得た示唆として、まず、保育者の子どもへのかかわりが参考になると保護者が受け止めている様子があり、養成の中で保護者のモデルになることを伝える必要がある。保育所が求められている具体的な内容として最も多く挙げられたのは病児への対応である。その他の内容についても、時間的場所的な預けやすさを期待する声が多い。さらに保育者養成校に求められる要望としては、一言で言うともまさに本学科の教育理念であり教育目標であるが、子ども理解、子どもへのかかわり、保護者理解、保護者への対応等について一層実践力の伴う養成を求められているといえる。